

来するガクアジサイのゲノム解析を行い、ミズキ目のなかで初めて全ゲノムを解読した。また丸尾らの共同研究グループ（名古屋大学・角皆潤教授ら）が琵琶湖の謎のメタン濃集水塊の形成メカニズムを解明し、夏季に亜表層に濃集していたメタンの大部分は、沿岸域に広がる堆積物中で生成されたものであることを明らかにした。また杉浦省三教授が第5回滋賀テックグランプリ最終選考会で「The養殖革命」「魚食文化復活の鍵を握る『骨なし魚』の養殖」についてプレゼンテーションを行い、パートナー企業賞を受賞した。

今年度は昨年度末から続く新型コロナウイルス：COVID-19感染症の蔓延によってさまざまな活動に制約があり、野外での研究活動をもっぱら行う本専攻の大学院生にとっては大きな痛手であったことは否めない。その中でも個々が自分の可能な範囲で研究活動を進め、修了を予定していた学生全員が無事に修士論文を提出できたことが何よりであった。留学生についても、入国の許可がなかなか下りずに苦労した研究生もあり、世界の現在の状況が研究活動に大きな制約を与えていることは間違いない。一方でそれを超えていこうとする様々な工夫もされており、見方を変えるといい意味での変化を起こすきっかけにもなったかもしれない。

大学院入試についても受験者の安全確保、感染の可能性のある受験生がいた場合の対応についての議論がなされた。結果として9月、2月の試験共に受験不可・追試希望となった学生はおらず、予定通り試験を実施できたことは幸いであった。次年度以降は試験科目のうち英語についてはTOEICスコアを採用することになり、今まで以上に英語力を公平にはかることができると期待される。

変化というと、環境科学部の実習調査船として25年間、琵琶湖観測に活躍してきた「はっさか」が新船の建造に伴い、この3月で引退となった。環境科学研究科・環境科学部の実験実習・研究調査だけでなく、工学部（水中微生物探査）、人間文化学部（湖底遺跡の探索）などにも利用いただいて成果を上げてきた。この4月

からは一回り大きくなった「はっさかII」が代わって就航する。「はっさか」で培われたノウハウと、改善点が盛り込まれており、これからの実習・調査での利用が今から楽しみである。

環境計画学専攻のこの一年

白井 宏昌

環境計画学専攻長

2020年度は、滋賀県立大学学位規程および大学院学則に基づき、論文提出によって1名（環境意匠研究部門）に博士（環境科学）の学位が授与された。また、環境意匠研究部門では12名、地域環境経営研究部門では3名の学生が博士前期課程を修了し、修士（環境科学）の学位を授与された。

環境意匠研究部門では修士論文、修士設計のいずれかを選択するが、本年度は修士設計6名、修士論文6名の提出があった。新型コロナウイルスの感染が続いた状況での研究、特に海外の建築・都市を対象にした研究は、渡航制限もあり研究の遂行は困難を極めたと思うが、そのなかでも例年同様、綿密な調査・分析に基づいた研究・設計へと纏めていったことは特筆すべきであろう。最終研究発表会では、発表者の多様なテーマに対して質疑応答や批評が行われ、2点の修士設計と1点の修士論文に優秀賞が贈られることとなった。

地域環境経営研究部門では、修了した学生のうちそれぞれ1名が、資源・環境経済領域、環境政策、環境システムの領域で、修士論文を提出した。最終研究発表会は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインで開催され、発表及び活発な質疑が行われた。

なお、環境意匠研究部門の在籍学生数は、博士前期課程29名（M1：17名、M2：12名）、博士後期課程1名（ともに2021年3月31日時点、休学学生含まず）、地域環境経営研究部門の在籍学生数は、博士前期課程6名（M1：6名）、博士後期課程1名であった（ともに2021年3月31日時点、休学学生含まず）。